

# 生成AIが与えるIT戦略へのインパクト



矢倉健一郎

## CONTENTS

- I 生成AIの現状
- II 生成AIのIT関連業務へのインパクト
- III 生成AIがITアーキテクチャへ与えるインパクト
- IV IT戦略へのインパクト
- V まとめ

## 要約

- 1 ChatGPTの鮮烈なデビューにより急速に関心が高まった生成AIは、企業のIT戦略へも影響を与える。
- 2 生成AIはIT関連業務のすべての工程にインパクトを与える。各工程の業務で利用できるツールが登場してきており、積極的な活用により、爆速化したIT部門の実現が可能となる。
- 3 生成AIの活用により、ITのアーキテクチャが形を変えていく。ユーザーはAIコンシェルジュと対話することでシステムを利用する形となり、従来、システム化が困難だった人の創造的な業務までがシステム化の対象となる。また複数のAIとそれらを統括するAIオーケストレータが登場することで、業務プロセスの自動化が進む。これらの変化によって、ITのアーキテクチャはAI-Oriented-Architectureに変化する。
- 4 このIT関連業務の爆速化とAI-Oriented-Architectureへの変化を計画的に実現することが企業のIT戦略において重要となる。また、これらの実現によりデジタル知的資産の増価サイクルが実現し、AIは重要な経営資源となる。
- 5 生成AIを含むAIの精度に失望し、その成長を待つのではなく、現状の生成AIの実力と向き合い、工夫して利用することを前提にし、生成AIの成長とともに、利用する側も成長する姿勢が求められている。

## I 生成AIの現状

2022年11月末、ChatGPTは公開から2カ月で利用者1億人を超えるという鮮烈なデビューを飾り、これにより世の中の生成AIへの関心は急速に高まった。2023年にはGPTがAPIを呼び出して利用できるようになり、ユーザーはさまざまな用途で大規模言語モデル（LLM：基盤モデルともいわれる）を利用できるようになった。また、それに追従する形でGoogle、Amazon、MetaなどのビッグプレイヤーやAnthropic、Cohereなどのスタートアップが各社オリジナルのLLMの提供を開始しており、LLMの選択肢の幅も広がっている。

一方、生成AIは当初、もっともらしい嘘を出力する（ハルシネーション〈幻覚〉：AIモデルがデータに基づいていない、現実とは異なる情報や結果を生成することを指す）などの特性から、利用に関するリスクが懸念されていた。しかし、これに関しては、利用者が増える中で、プロンプトエンジニアリングやRAG（Retrieval-Augmented Generation：検索拡張生成）などの利用者側の工夫による対策が普及することで、利用のリスクよりメリットが大きいという認識が広まりつつある。

また、生成AIは人と同等の会話を成立させるだけでなく、音楽、画像などを生成するマルチモーダルなLLMも次々と発表されており、広告パッケージ生成などの実証的な活用例も増えてきている。

このように、急速に普及が進んでいる生成AIは、企業のIT関連業務での活用も進んでいる。GitHub Copilotに代表されるコード生

成ツールによるソフトウェア開発の高速化や、生成AIを組み込んだChatツールにより、ヘルプデスクの問い合わせ業務を効率化するという活用がその代表的な例である。

本稿では、生成AIに関して特に日本企業のIT部門へ与える影響として、IT関連業務へのインパクト、ITアーキテクチャへのインパクトについて説明し、戦略に与えるインパクトを考察する。

## II 生成AIのIT関連業務へのインパクト

本項では、生成AIがIT部門の業務に与えるインパクトを、IT関連業務の工程別に述べる。

### 1 企画工程

企画工程では、アイデアの量産と、企画時点での具体性向上に寄与する。

たとえば、「クルマのドライバー向けのスマートフォンアプリのアイデアを5つ考えてください」という問いかけに対して、生成AIは瞬時に5つのアイデアを生成する。さらに段階的にやり取りをすることで、アイデアを洗練させることもできる。「見知らぬ土地へドライブに行く際、ドライバーが感じるペインを考えてほしい。ドライバーの行動を次のシナリオごとに考えたうえで、ペインを抽出してほしい。シナリオ：出発前、乗車時、ドライブ中、休憩、目的地到着」「各ペインに対するユーザーの時間的損失の大きさはどの程度か」「そのペインを解消するアイデアを5つつくってほしい」「そのアイデアを実現する方法は何か」「その実現に対する

技術的課題は何か」。このようなやり取りを通して、アイデアの量産・洗練を高速に繰り返し行うことができる。

従来は、企画部門のメンバー複数人が集まり、ブレインストーミングを行うなどして発案していたが、それを高速に一人で行うことができる。

また、この生成したアイデアを基に、アプリのモックアップを自動で生成するツールも登場している。文書化したアイデアを入力するだけで、スマートフォンアプリの画面イメージ、画面遷移を自動で生成することができる。これにより、企画の具体性が増し、モックアップをつくることで、ユーザーインタビューによるアイデアの改善が行えるようになる。

このようなプロセスを経て、企画工程でのアイデアの量産とそのアイデアの洗練が高速に行えるようになる。

## 2 設計工程

設計工程では、設計自体よりもその付帯業務での活用から始まっている。設計書に必要な図を生成AIで生成することや、過去の設計書を対話形式で検索するなど、設計する際に必要な作業が生成AIを利用すれば短期間で実現できるようになっている。

たとえば、設計工程で必要とされる業務フローも生成AIの力を借りて生成することができる。「物流の倉庫業務におけるトラックの到着から荷物の保管までの流れを順を追って説明してください」と生成AIに業務プロセスの素案を作成させ、それを企業の実態に合わせて修正する。そのうえで、生成AIを用いてMarkdown形式に変換して、図として利用するということが可能である。

そのほかにも、有識者が不在となっているプログラムを生成AIに読み込ませ、内容を解説させることもできる。ITの開発現場では、古くからのシステムが長きにわたって維持・管理されている。このようなシステムに関しては、開発者がすでに退職・転職しているなど有識者不在なことも少なくない。また、内製化の流れから社内で作成したエクセルマクロやローコードツールなど、小規模なものに関してはいつ誰がつくったかもわからないようなソースコードが存在する。こういった有識者不在となったプログラムを生成AIに入力して、そのプログラムの内容を解説させることができる。

技術的負債となっている過去のシステムの解説にも生成AIは一役買うということである。

## 3 開発・テスト

開発については、GitHub Copilot、Tabnineなど実用的なツールが複数登場している。つくりたいプログラムについて、一般的な言葉で実現したい内容を記述すると、生成AIがプログラムを生成するというものである。これらのツールは、公開されている大量のソースコードを学習した生成AIを使い、実現したい内容を理解してプログラムを生成してくれる。

また、開発時に出力されたエラーコードを生成AIに伝え、修正方法を提示させる、という使い方もでき、開発現場ではすでに実用化が始まっている。これまでエンジニアはエラーコードをインターネットなどで調べ、修正すべき箇所を特定・修正する、ということを行っていたが、自動で修正箇所が特定され

るため、開発が加速する。

実際には、生成されたソースコードを基に、ほかのプログラムと組み合わせながら実用的なプログラムに修正することも必要なため、現時点では素人が生成AIを使うことでITシステムが完成する、というレベルではない。しかし、特に未熟なエンジニアの開発生産性は大きく上がることが期待されている。

GitHub Copilotを提供するGitHub社による調査では、ツールの利用者の88%が生産性が向上したと回答しており、GitHub Copilotを使用した開発者は、使用しなかった開発者と比較すると、55%早くタスクを完了したという結果も出ている<sup>注</sup>。また、同社によると、生産性向上だけでなく、ツールを利用することによって仕事の満足度が向上した、単純作業の精神的負担が軽減された、という回答が多く得られているという。

開発だけでなくテストに関してもEggplant DAI、UFT One、Autifyなど実用的なツールが複数登場してきている。プログラムのソースコードを入力してテストコードを生成するツールや、Web画面を入力するだけで、入力欄やボタンを網羅的にテストするコードを生成し、自動でテストを実行してくれるようなツールも登場している。

一方で、公開されているコードの少ないレガシーな言語では精度が出ないことや、厳密に標準化ルールにのっとったコーディングを行うことが難しいなど、現時点での生成AIの弱点も明らかになってきている。

#### 4 運用・障害対応

システム運用については、障害時のエラー調査・対応案提示や、ヘルプデスクへの問い

合わせをChatBot化するなど、活用が始まっている。

問い合わせ対応のChatBot化については、特に実用例が増えている領域の一つであるといえる。過去の問い合わせ履歴やユーザー向けに整備したFAQなどを、後述するナレッジデータとして整備し、生成AIに入力しておく。ユーザーは生成AIに一般的な言葉で「〇〇の操作方法で困っているんだけど、どうしたらよいか」と問いかけることで、回答が得られる仕組みである。ChatBotに関しては、生成AI登場前からコールセンターへの問い合わせを削減する目的などで利用されていたが、あらかじめ用意した定型的な問い合わせに対する応答ができる程度であった。生成AIの登場で、より自然な対話でのやり取りができるようになってきている。実際に、生成AIを用いることでコールセンターでの問い合わせ対応時間が50%前後改善するという事例が複数出てきている。

また、システム障害時のエラー調査や対応案の検討時にも、生成AIの活躍が期待されている。システムのログ（アプリログ、システムログ、リソースログなど）と、システムの構成情報（アプリケーションコード、インフラ構築自動化コードなど）を生成AIに入力することで、システムのエラーメッセージに対して、原因箇所の特定や修正案を提示するようなツールも登場してきている。

生成AIにより、従来、エース級のエンジニアの存在に依存し、属人化していた運用から解放され、人材の育成・ローテーションが可能になる期待が持てる。

ただし、生成AIのインプットとなる問い合わせ履歴やシステムのログを保管している

ことが前提になるため、これまで以上に運用の高度化の重要性が増すともいえる。生成AIのツールの成長を待つだけでなく、足元の地道な運用改善は行っておくことが重要である。

## 5 プロジェクトマネジメント

プロジェクトマネジメントは、特に生成AIの活躍が期待される領域の一つである。現在では会議の録音・書き起こしから、要約して議事録を作成する程度にとどまっているのが実態であるが、生成AIの特徴を踏まえると、進捗管理やリスク・課題検出に期待ができる。

従来、PM（プロジェクトマネージャー）はコミュニケーションチャットツール、スケジュール管理のofficeツール、課題管理ツールなど、複数のツールを使い分けてプロジェクト状況を把握していたが、これらを生成AIに入力しておくことで、生成AIが把握したプロジェクト状況に応じて課題抽出やリスク検出をしてくれる世界がやってくるだろう。短期的には、議事録の要約から課題を抽出し、関連するチームにコミュニケーションツールを通じて連絡することや、会議内容を踏まえて進捗管理ツールを更新することもできるだろう。

こうした高度化が進むと、進捗報告のための会議などは不要になる可能性もある。各プロジェクトのメンバーが、開発実績としてのソースコードやドキュメントを登録することで生成AIが進捗を記録し、PMは生成AIに進捗を聞くことで全体の状況が把握できる世界が来るかもしれない。これにより、PMは本来時間をかけるべき課題の対応策検討や、リ

スク回避のための計画に時間を使うことができ、開発者は進捗報告などのための打ち合わせ時間が削減され、プログラム開発に注力できる将来がやってくる。

## 6 まとめ

生成AIの活用によるIT関連業務の「爆速化」は着実に進んでいる。本章で取り上げた以外にも、レガシープログラムのマイグレーションや人材育成での活用など、さまざまな事例が出てきている。

注意すべき点は、生成AIを適用したツール群の成熟度はまちまちである、ということである。コードの自動生成は実用性が高く、AWSやGoogleは実際に開発に取り入れているという報告もある。一方で、企画や運用工程でのツールは、業務適応のためにはある程度の誤りを人が許容する、生成AIでつくったドラフトを基に人が作業する、など使い方に工夫を強いられるものもある。

これらの成熟度の違いを理解し、ツールの成熟度の成長を待つだけでなく、利用者側が生成AIの実力、利用に関する工夫を学びながら、部分的にでも業務適用の効果を得てほしい。

生成AIの導入とともに新たに生まれる課題や懸念についても留意しておきたい。前述のとおり、生成AIによりアイデアの量産が実現することや、開発効率の向上、運用での品質安定化などに期待できる一方、人にはより高度な判断・思考が求められる。量産されたアイデアから絞り込むこと、複数案を考慮し自社・市場の状況を加味してアイデアを洗練すること、テスト結果から品質評価を行うこと、障害対応において提示された対応策が

表1 生成AIはAIネイティブなIT部門の「爆速化」を実現する

	適応領域	効果	成熟度	代表的なツール
企画	企画検討・プレスト 画面デザイン	企画案の量産 企画の具体性向上	★★★☆☆	ChatGPT UIZARD Fronty
設計	業務フローなど図の生成 既存プログラム解析 リファクタリング	開発の加速 保守性の向上	★★★☆☆	ChatGPT
開発・テスト	コード生成 テスト自動化		★★★★☆	GitHub Copilot Tabnine Eggplant UFT One Autify
運用・ 障害対応	エラー原因調査	状況理解・ 対応策立案の迅速化	★★★☆☆	New Relic Grok Duet AI for Google Cloud
プロジェクト マネジメント	議事録要約 PM支援	早期リスク検知 プロジェクト品質安定化	★☆☆☆☆	Microsoft Copilot Notion AI

適切か判断すること、プロジェクトマネジメントにおける計画や課題対策の推進、などは人が行うべき領域として残るだろう。生成AIに依存することでこれらの能力の習得・育成が阻まれないようにしていく必要がある。さらに、生成AIを用いることで対応できる範囲については、均質化が進む可能性もあり、企業はそうでない領域で差別化を図る必要が出てくる。

ツールごとの成熟度に応じた取り組みと工夫、また将来生まれるであろう課題についても留意しつつ、生成AIの成長とともに、業務の爆速化を実現したいところである（表1）。

### Ⅲ 生成AIがITアーキテクチャへ与えるインパクト

生成AIの普及とともにITのアーキテクチャ

は姿を変えていくと予想している。本章では、どのような形にアーキテクチャが変化するか、一つずつ順を追って説明する。

#### 1 UIは文字入力・選択からAIコンシェルジュとのインタラクティブなやり取りへ

従来のシステムは、入力欄への文字入力や、プルダウン、ラジオボタンなどの選択肢の選択により、人がシステムに対して指示を出し、操作していた。生成AIが登場したことで、システムへの人からの入力は自然言語での入力に変化していく。この入力も文字入力ではなく、音声や映像に変化していくことも考えられる。

たとえば、リビングのラグを購入する場面を想像してほしい。従来型のECサイトでは、「商品分類：カーペット・ラグ・マット」を選択し、表示された商品一覧から、「色：ベ

ージュ」、「サイズ：100cm×140cm」、「価格帯：1万～2万円」といったような形で、膨大な選択肢の中から人が欲しい商品の絞り込みを行うことで、購入する商品にたどり着くのが一般的であった。

生成AIがインターフェースとして介在すると、このやり取りが自然言語での対話的なやり取りになると想像できる。

人：「マンションのリビングに置くラグを探しているんだけど、いいものないかな。予算は1万円程度を予定しているよ」

AI：「新しいラグを探しているんですね。ラグが変わると部屋の雰囲気も変わり、気分転換になりそうですね。リビングの広さはどのくらいですか。一般的な12畳程度の広さであれば、140cm×140cmもしくは、100cm×140cmくらいがオススメです。参考までにいくつか例を表示しますね。またお好みの色があれば教えてください。定番カラーとしては、ベージュ、グリーン、アイボリーなどがあります」

人：「100cm×140cmがいいな。色はベ

ージュを見たいな」

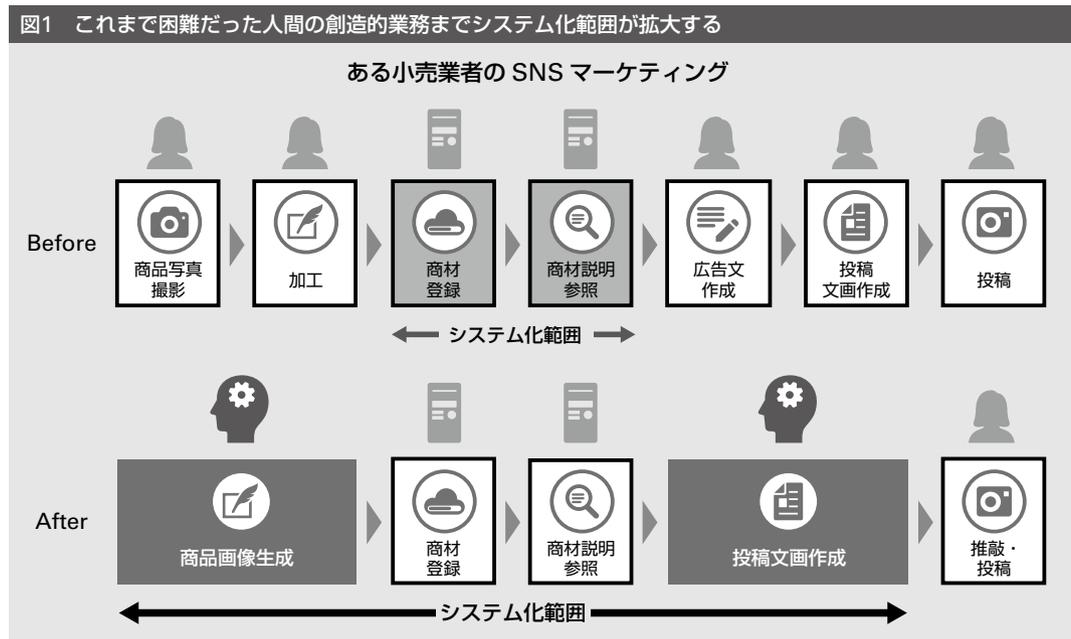
AI：「分かりました。それではいくつか人気のものをピックアップしますね。今の季節は毛足が長く柔らかいラビットファータッチラグが人気ようです。肌触りの感覚など指定してもらえれば、ほかの商品もオススメしますよ」

このように、店員とのやり取りのような会話を繰り返すことで、自然と商品を選択できるような形が想像できる。

実際に、ECサイトや予約サイトなどで、このAIコンシェルジュとのやり取りをサイトに組み込んだ事例が増えている。

## 2 従来困難であった 創造的な業務まで システム化の範囲が拡大

生成AIの導入は対カスタマーだけでなく、企業の至るところで進んでいく。図1はカナダの小売業が実際に行っている、SNSを使ったマーケティングへの生成AIの導入である。従来、人が実施していた商品写真撮影、紹介



文の作成の部分に生成AIを導入し、SNSへの投稿サイクルを短期化している。

生成AIを用いることで、商品画像の明るさを変える、背景を変えるなど、見栄えをよくする加工を自動で行うことができる。最近では動画の生成も行える生成AIも登場しており、商品画像を基にショートムービーを生成できる可能性も期待できる状況になってきた。商品カタログの情報などの要約を生成AIにインプットすれば、商品の説明文を何パターンも簡単に生成することもできる。

また、企業では製品パンフレットの翻訳にも生成AIを活用している。カナダでは英語とフランス語の2カ国語が公用語と指定されており、製品パンフレットなどは2カ国分作成する必要がある。従来はこれを外部の翻訳家へ委託し、レビュー・推敲などを数週間かけて実施していたが、現在では生成AIに翻訳させたものを社内で最終チェックするという流れに変えており、こちらでも業務の短期

化に成功している。

ここまで、業務の短期化の例として説明したが、これをシステム観点で捉えると、生成AIの登場により、これまで人の創意工夫が必要とされた創造的な業務まで、システム化できる範囲が広がっていくといえる。

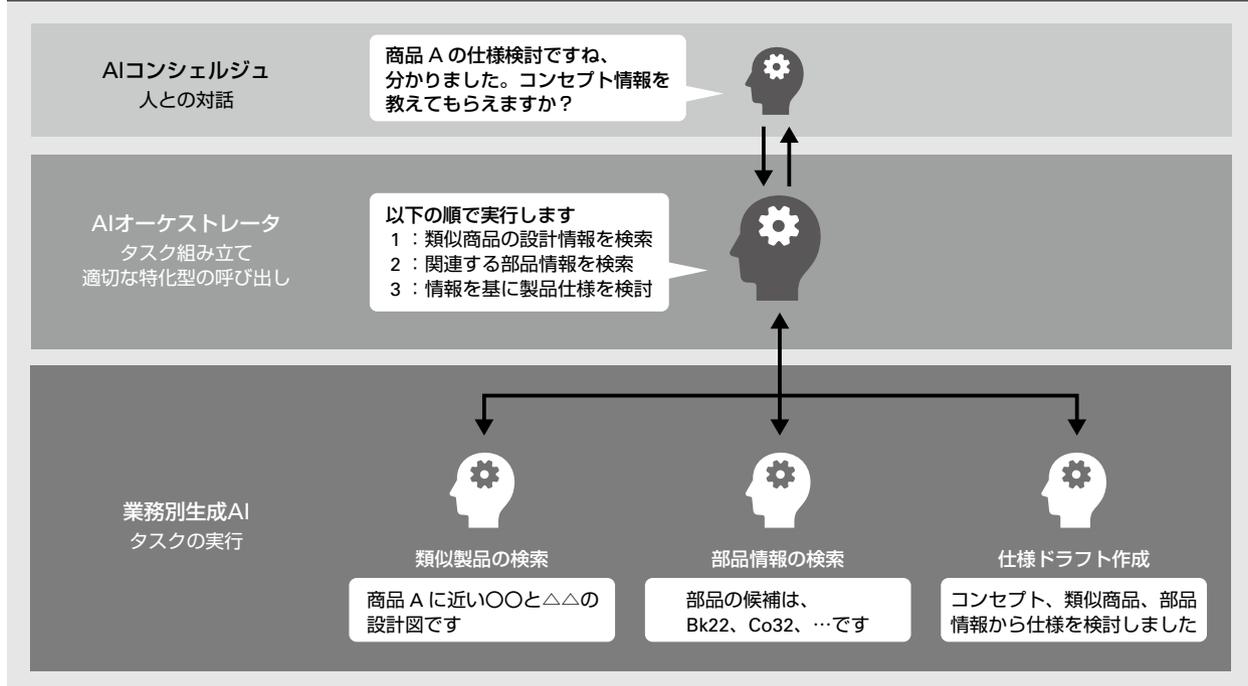
### 3 AIオーケストレータの登場

1、2節のような変化が続くと、生成AIを活用するアプリケーションのアーキテクチャは図2のような多層構造になると考えている。

最下層に複数並んでいるのが、2節で述べた業務個別の生成AIを含むアプリケーションであり（生成AIを含まないアプリケーションの場合もある）、これらに指示を出すのがAIオーケストレータである。

AIオーケストレータは、1節で述べたAIコンシェルジュが受けつけた人の要望に対して、要望を実現するために必要なタスクの実行順序を検討し、業務別生成AIに指示を出

図2 生成AIを利用するアプリケーションは多層構造となり、AIオーケストレータが複数の生成AIを組み合わせ、業務プロセスを自動化する



す。業務別生成AIはその指示に従い、一つのタスクを実行する。AIオーケストレータは業務別生成AIの処理結果をまとめて受けつけ、総合的に判断して結果をAIコンシェルジュに返す役割を担う。

業務別生成AIが増加すると、各タスクに適したAIを選択し使い分けが必要になるが、このAIオーケストレータを仲介することで、単一のタスクではなく、一連の業務プロセスをシステム化することができる。

生成AIがここまで注目を集めたのは、LLMが登場したためである。LLMはインターネット上の膨大な量の情報を学習して幅広い知識を持っており、人と同じレベルの対話が成立するという特徴がある。一方で、動作に大量の計算機リソースが必要であるためコストが高く、レスポンス（応答速度）がやや遅いという特徴もある。また、汎用的な知識を持っている一方で、企業特有の業務知識は兼ね備えていない。そのため、現在では業務活用に向けて企業特有の知識を学習させた小型の専用モデルを構築することも考えられている。

この小型専用モデル（業務別生成AI）の構築が進むと、利用者は業務ごとに生成AIを使い分ける必要が出てくる。こうした面からもAIオーケストレータの存在は、今後、重要になってくるだろう。

#### 4 ナレッジデータの登場

汎用のLLMを業務別生成AIとして利用するために必要となるのが、ナレッジデータである。ナレッジデータは、企業が保有している製品の設計情報や、顧客向けの商品パンフレット、マニュアル、など、企業特有の情報を生成AIに理解できる状態に加工したもの

である。このナレッジデータが企業固有の業務知識を得る源泉となり、生成AIが業務別のタスクを実行できるようになる。

LLMのハルシネーション対策や業務適応のために一般的となったRAG構成でも、これらのデータがLLMの知識の源泉になる。

ナレッジデータは従来から保有している情報ではあるが、それらを人ではなく、AIが読みやすい形式で保持し、鮮度を保つ必要がある。

生成AIを企業特有の業務で活用するためには、このナレッジデータの整備がカギとなる。

たとえば、最近さまざまな企業の事例として登場するコールセンターでの活用では、これまでのコールセンター業務で蓄積した「顧客からの問い合わせと回答」をナレッジデータとして活用している。一方で、ナレッジデータの基となる情報が残されていないことが原因で、実現しにくい事例も存在する。企業内での設計書や企画書のレビューへの生成AIの利用がそれである。これらを実現するには、「過去の設計書とレビュー時の指摘・アドバイス」などをナレッジデータの基とする必要があるが、レビュー時の指摘などは形式化されて企業内に残されていることが少なく、ナレッジデータを生成できないことが多い。

生成AIの業務適用には、数年先を見据えてナレッジデータの基となる業務情報を定義し、計画的に蓄積・整備していく必要がある。

#### 5 AIガバナンスの必要性

最後にガバナンスについて少しだけ触れる。

ここまでさまざまなAIについて述べてきたが、これらのAIが企業にとってリスクのある情報を発信せぬよう、AIに対してコンプライアンス、レピュテーションなどの観点でモニタリングする仕組みが必要である。

生成AIは企業のさまざまなビジネスドメインで適用が検討されており、OSS（オープンソースソフトウェア）のLLMも次々と登場している。生成AIを活用するアプリが企業内で乱立し、出自の不明なLLMが利用されている状態や、他社で訴訟・リスク喚起がなされているLLMを利用し続けている状況になりかねない。

また、生成AIの利用においては、クラウドベンダーなどが提供するLLMのAPI提供を受けて利用する形も多いだろう。生成AIの進化は非常に速く、クラウドベンダーはモデルを日々更新している。昨日まで会話が成立していたLLMが翌日突然異常な動きをす

るという可能性もある。実際に2024年2月にはChatGPTが突然支離滅裂な回答をするようになったという報告があった。

AIを利用する企業としては、このような事態が直接自社の顧客へ影響を与えないよう、AIをガバナンスする仕組みが必要となる。

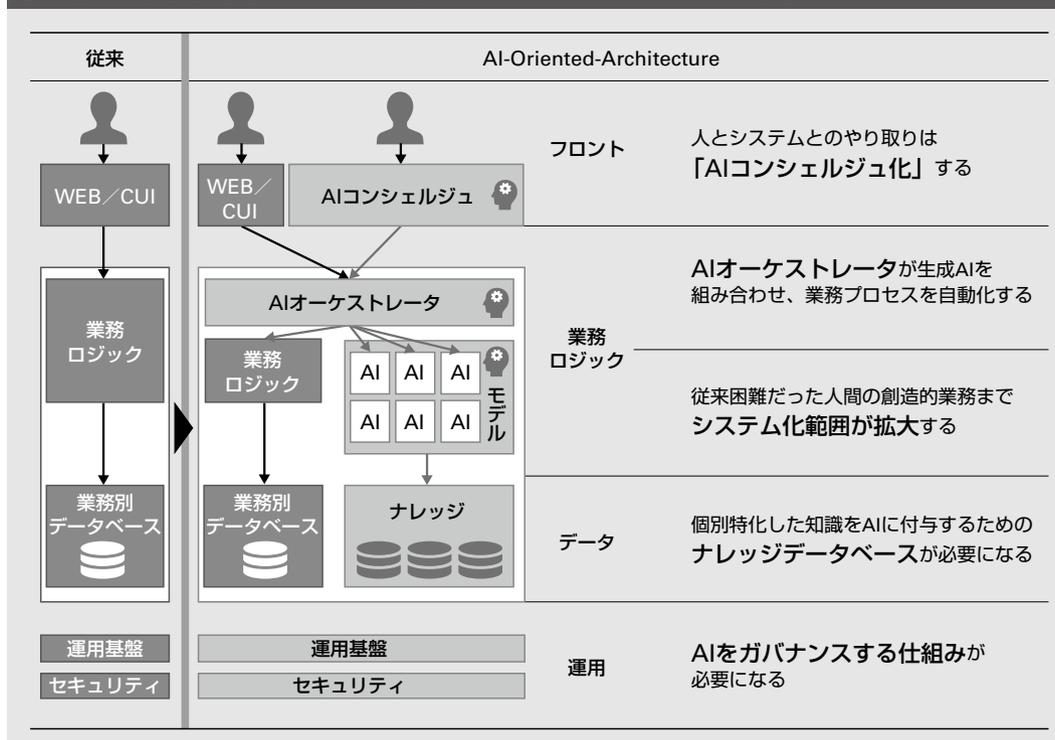
生成AIを使ったアプリケーションの出力を直接外部へ提示しないように、人手で最終チェックをするフローをルール化することや、生成AIの出力をモニタリングする仕組みを取り入れ、異常検出時には生成AIを切り離すなど、仕組み化していくことが求められる。

## 6 まとめ

以上をまとめると、ITのアーキテクチャは図3のようなAI-Oriented-Architectureに変化していくものと考えている。

従来のITシステムの一部にアドオン・補

図3 生成AIの利用によりアーキテクチャはAI-Oriented-Architectureに変化する



完するような形で、生成AIがコンシェルジュ、オーケストレータとしてシステムに浸透し、AIが組み込まれていることを前提としたアーキテクチャ構成を検討する必要が出てくるであろう。

またここでは述べていないが、運用基盤やセキュリティに関しても、対象にAIが組み込まれていることを前提とした仕組みづくりが求められる。

## IV IT戦略へのインパクト

最後に生成AIを含むAIが普及する時代でのIT部門の役割について述べる。

### 1 AIネイティブ化し、デジタル知的資産を増加させる役割を担う

IT部門は、これまで述べた2つ、「IT関連業務の『爆速化』」と「AI-Oriented-Architectureの変化」を実現し、知的資産の増価をドライブする役割を担う。

図4は、中央にある企業内のデジタル知的資産を増価させるサイクルを示している。

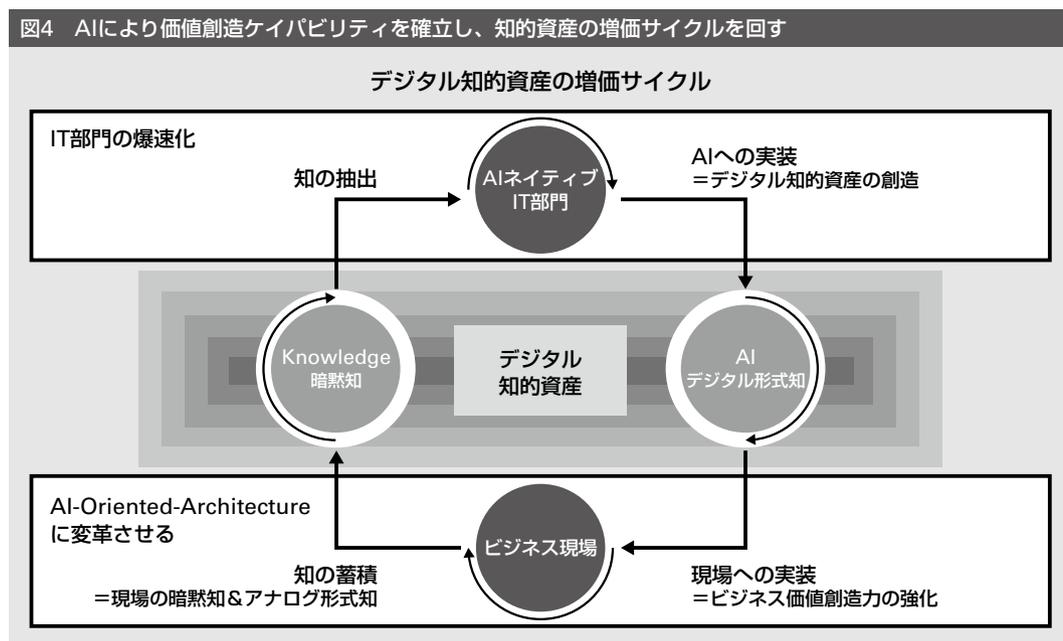
生成AIを含むAIを使いこなし爆速化したIT部門により、企業内におけるAIの実装が進む。AIをビジネス現場に導入することで、「新たな知」が蓄積される。これは、熟練技術者のノウハウや顧客の声などの暗黙知を指している。この新たな知を蓄積し、そこから抽出した知をナレッジデータとして活用し、新たなデジタル知的資産を創造する。

このようにしてサイクルが好転すると、企業におけるデジタル知的資産が増価していく。

IT部門はこのサイクルを確立し、AIネイティブ化することでこのサイクルを高速に回し、企業の競争力を高める役割を担うと考えている。

### 2 AIのタレントマネジメント

企業特有のナレッジデータを基にしたAIをどのように活用するかについては、企業の差別化の源泉となり得る。また、従来の減価



償却していくIT資産と異なり、AIは前述の増価サイクルにより、価値を継続的に増加させていくことができる。これらのことから、AIは従来の四大経営資源に匹敵する重要な資源となると考えている。

今後、企業はあらゆる業務で複数のAIを使い分けることになるが、その異なる能力を持つAIをマネジメントすることが求められる。

たとえば、必要なAIを定義し投資計画を立て、計画的にナレッジデータを整備することや、AI導入によって得たナレッジをほかのビジネス領域に展開することは、重要な役割の一つとなるだろう。

## V まとめ

本稿では、生成AIによるIT戦略へのインパクトをテーマとし、ITに関連する業務、ITアーキテクチャ、システム化の範囲について述べた。生成AIによるビジネスへのインパクトについてはさまざまな事例が出てきているが、それらを実現するケイパビリティとしてのITの企画・実装力を生成AIによりエンハンスメントすることにも目を向けることで、ビジネス変革を加速することができるだろう。

生成AIについては、さまざまなツール、さまざまな事例が出てきているが、多くの企業で使い方を模索している段階でもある。前半で述べたIT業務の爆速化や、後半で述べ

たAIコンシェルジュ化、AIオーケストレータの導入についても事例が登場しつつある一方で、各企業へ導入するためには定型化されたパッケージを導入するだけで成立するものではなく、用途に合わせたチューニングにより精度・性能が異なってくる。

企業として適応効果が大きい箇所に仮説を立て、実際の利用を通して現状の限界や課題を理解したうえで、課題解消のための企業ごとの工夫が求められている。

また、生成AIは時間とともにモデルの精度の向上や、対応できるタスクの拡大も進んでいる。現時点の精度に失望して業務適応をあきらめる、つまり、生成AIの成長を待つのではなく、試行錯誤と改善を積み重ね、生成AIの成長とともに、利用する側も成長していく必要があるだろう。

### 注

GitHub公式ブログ「Research: quantifying GitHub Copilot's impact on developer productivity and happiness」

<https://github.blog/2022-09-07-research-quantifying-github-copilots-impact-on-developer-productivity-and-happiness/>

### 著者

矢倉健一郎（やぐらけんいちろう）

野村総合研究所（NRI）TMXコンサルティング部  
GM

専門はシステム化構想・計画策定、IoTシステムアーキテクチャデザイン、データ活用促進支援、AI・データ分析